

薬剤耐性菌の治療とその感染対策

前崎 繁文

感染症の治療には抗菌薬が投与される。しかし、抗菌薬治療の相手となる原因微生物は巧みな方法を使って、耐性菌を生み出してきた。特に現在の耐性菌は、多くの種類の抗菌薬に耐性を獲得する薬剤耐性菌が顕著であり、その治療と感染対策は日常臨床において極めて重要な問題となっている。薬剤耐性菌の中で最も一般的な菌はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）である。MRSAの治療には抗MRSA薬は投与されるが、近年新たな薬剤の登場とともに、治療薬の選択が検討されている。さらにMRSAはこれまで院内感染症の中心的原因菌であったが、今では市中感染症の原因菌にも多く認められ、その感染対策の考え方も変貌しつつある。院内感染症の原因菌としては、薬剤耐性緑膿菌（MDRP）や薬剤耐性アシネトバクター・バウマニー（MDRAB）などの多剤耐性菌が時にアウトブレイクを引き起こし、大きな社会問題としてマスコミでも取り上げられることがしばしばある。これらの薬剤耐性菌に対しては、有効な抗菌薬が非常に限られているため、感染の蔓延を未然に防ぐための院内感染対策が極めて重要となる。その他にもバンコマイシン耐性腸球菌（VRE）などのグラム陽性菌も時にアウトブレイクの発生が報告されている。また、院内感染症の原因菌のみならず、今では市中感染症の多くの原因菌も多剤耐性化の傾向を示しており、新たな抗菌薬の開発が著しく停滞する中で、極めて深刻な問題となりつつある。今回の講演では、このような薬剤耐性菌の治療における抗菌薬の選択と、その感染対策の実際について述べる。